編集委員長だより

暮れもいよいよ押し迫り，今年を思い返しているうちに編集委員長として結核病学会のために自分が何ができるかを自問しています。

本学会は1923（大正12）年に北里柴三郎会長の下に第1回総会が開かれて以来，来年，岐阜市，長良川国際会議場で開催される森下宗彦会長主宰の総会で89回を迎える最も歴史のある学会です。本学会が中心になり，その他，結核感染診断研究会，結核・非定型抗酸菌症治療研究会，結核療法研究協議会，実験結核研究会，非結核性抗酸菌症研究協議会，臨床抗酸菌研究会等，由緒ある研究会と共に，様々な結核に関する知見を発出し，それら知見を基に我が国の結核診療が形成されてきたと思います。

最近，私が関係する結核・非定型抗酸菌症治療研究会（抗治研）について必要があり，その歴史について調べています。抗治研は発足してから四半世紀を経ようとしている研究会です。抗治研初代会長である島尾忠男先生から，その前身は日本結核化学療法研究会（日結研）であることを教えて頂きました。日結研をご存知ない方が多いと思います。感染症法申請時，粟粒結核を含む肺結核の分類として使用する学会分類（日本結核病学会病型分類）がよく知られていますが，抗結核化学療法効果判定上，胸部エックス線所見が重要であった時代は，学研分類が広く使われていたようです。私が結核病学を教わった故渡辺定友先生がよく学研分類による病型を口にされていました。今は，治療効果判定は菌所見であり，学研分類は役目を終えたとされています。そういったこともあり，日結研は抗治研へ発展的解消したのかもしれません。

若手医師指導のための回診時，慢性肺アスペルギルス症，肺MAC症等の慢性肺感染症増悪に対し，私はよく管内性進展によるシューブ（またはシュープ）という用語を用いて指導します。シューブは，ドイツ語で悪化，増悪を指す言葉ですが，元々は結核治療中に菌体成分の管内性進展から起きる病状の悪化を示す結核病学の用語として使われてきた歴史があります。結核と同様な現象が慢性肺疾患で起こり，その病態の理解に結核病学の知識が応用できる良い例だと感じています。結核性空洞で見られるラスムッセン肺動脈瘤と同様な肺動脈瘤は慢性肺アスペルギルス症でも見られます。

学研分類，シューブ等，先人達が作り上げてきた結核病学の経験，知識を後に続く若手に伝えるのが私に課せられた使命だと最近感じています。本誌編集委員長として特にそう考えています。

査読をしていただいた先生方へお礼を申し上げます。　（斎藤武文）